

# 弔いの現場 学び深める

## 遺体安置施設など視察

東日本大震災の伝承や防災啓発の担い手育成を目指し、河北新報社などが運営する通年講座「311」『伝える／備える』次世代塾第3期の第2回講座が18日

あった。大学生ら受講生約80人が仙台、東松島両市や

いのちと  
地域を  
守る



グランディ21の総合体育館で西村部長（左端）らの講話を聞く受講生ら

宮城県利府町を訪問。多数の犠牲者と向き合った、弔いの現場の混乱を当事者から聞き、学びを深めた。

利府町では、遺体安置所の一つだった県総合運動公園（グランディ21）の総合体育館を訪問。遺体安置に携わった葬祭業「清月記」（仙台市）の西村恒吉業務部長（46）は「体育館の床一面にひつぎが並んだ。大災害が起きると、多数の遺体が発生する現実を知ってほしい」と訴えた。津波で大量の泥やがれき

が押し寄せた専能寺（仙台市宮城野区）では、足利一之任職（52）が「弔いのため安置所や火葬場を連日回った。悲しい犠牲を繰り返さないように備えておくことが大切だ」と強調した。

仙台市の震災遺構「荒浜小」も訪れたほか、東松島市では、土葬による仮埋葬が行われた大塩地区の跡地や旧野蒜駅などを巡った。

視察後、仙台市宮城野区の東北福祉大仙台駅東口キャンパスで行ったグループ討議では「実際に現場を見ることの大切さを痛感した」「現実を美化せず、直視することも備えて必要だ」などの意見が出た。

次世代塾は河北新報社、東北福祉大、仙台市の3者を核とした「311次世代

塾推進協議会」が17年4月に開講。3期目の本年度も、3月までに視察を含め15回の講座を予定している。